特集

バティックに魅せられて

・・・マレー半島東海岸工房巡り・・・

Malaysian Batik

バティック（蠟結染）とは、溶かした蠟で布に模様を描き、その布を染料の中に浸して全体を染め、染まった後に布を煮て蠟を溶かすと、蠟があった部分が染められずに模様として残る、という染色手法で作られた布のこと。

マレーシアンのバティックに魅了され、それに関する文献を独自にまとめた、松本高次郎さんにマレーシアバティックの歴史について綴っていただきました。

文・松本高次郎　写真・セニョ〜ム編集部

クランタン州のカンポン・プナンパンからカンポン・パダンを通るJalan P.C.B.を海岸に向かって走ると、自宅兼工房で作業するバティック職人の姿が多く見られる。

まつもと　こうじろう
松本　高次郎

1990年代と2010年代の2度、仕事でKLに駐在。早期退職して、現在は年に数回日本との間を往来。マレーシアの手工芸品を日本に紹介するオンラインショプ TropicalTexを構築中。

＜参考文献＞　Malaysian Batik--Reinventing a tradition
Batik Malaysia--Design & Innovation 1960s - 1990s

マレーシアンバティックの歴史

マレーシアでのバティックの発展は、1930年代、マレー半島東海岸のタイとの国境に近い、クランタンやトレンガヌで始まりました。マレーシアは中国などの東方の国々と、インドやアラブなどの西方の世界を結ぶ交易路の真上にあり、古くから多くの文物や技術がもたらされてきた所です。なかでも東海岸は近隣のタイをはじめ、世界の多様な文化の影響を受けながら、独自の芸術や工芸が花開いた場所だとされています。反対側の半島西海岸には強い王国や、西欧の進出があったりしましたが、そこから地理的に孤立していることが、この地域で独自文化が育まれた要因の一つのようです。

マレーシアのバティックは、このような文化的背景をもつクランタンやトレンガヌで、1930年代、「ブロック（19ページ写真右上）」と呼ばれる金属製の型が広く使われるようになってから、本格的に発展し始めました。インドネシアのジャワの伝統的なバティックは、ペン状の道具「チャンティン（18ページ写真左下）」を使って、手描きで蠟を置き、模様を描く、とても手間のかかる製法ですが、それには興味をもたれず、効率のよいブロックを導入し、はじめてマレーシアでのバティック生産が盛んになったようです。そして、それにはさらなる理由があります。20世紀初期、工業化されてしっかりと織られた、表面が滑らかな綿布がインドやイギリスから入るようになったこと、すでに19世紀後半から自然染料よりも扱いやすく、色も豊富な合成染料が出てきたことから、精密でカラフルな柄を描くことができるようになったことです。こうした背景から、この地域ではバティック以前から、染色の手法が徐々に広まっていました。いわゆる絞りの技法（バティック・ペランギ）や、木製の型を使ってプリントする方法、シルクスクリーンのような技術も試されていました。

この手法はインドネシアのように、細密で複雑かつ、熟練と長い製作時間を要するものを目指すのではなく、一般的に明るく、自由で大胆、しばしば抽象的で、それまでにない色使いを志向しています。現在もバティックの実演でよく見るのは、チャンティンを使って描いた布地に、筆で染色している場面です。このように、チャンティンの使用と70年代に始まった独特のバティックの創造は、マレーシアのバティック産業の発展に大きな役割を果たしました。

しかしながら、1990年代にはオリジナリティや創造性の成長が弱まり、新しい製品や市場の開拓に、あまり熱がこもらない時期もありました。そんななか、第5代アブドラ首相の夫人で、2005年に亡くなったトゥン・エンドン・マモッド夫人がイニシアティブをとり、バティックを世界に広めるためのさまざまなプロモーションが行われたり、数々の展示会やコンペティションなどが開催されるようになりました。2008年から公務員は木曜日にバティックを着るよう奨励され、政府機関に行くと、普段はスーツを着ている男性がバティックシャツを着ています。また、特別な催しでは男女民族を問わず、シルクのカラフルなバティックで着飾ることも珍しくありません。

今やバティックは衣類以外にも使用され、特注の柄が企業のイベントやグッズに使われたりもします。マレーシア航空の女性キャビンアテンダントがとても優雅なユニフォームを着ていますが、これもバティック柄ですよね。製作方法も、手間のかかる手作りの一品生産ものから、プリントした大量生産のものまで、裾野はとても大きく広がっています。

約90年にわたって発展してきたマレーシアンバティック。なかには「これもバティック?」というものもありますが、伝統的な技術はしっかり守りながらも、新しいものに果敢に挑戦し続けているのです。

近代のマレーシアンバティック

1957年のマラヤ連邦独立以降、建国の熱気と共にさまざまな分野での人材育成が行われ、バティックの製作でも技術を学んだ人たちが活躍し始めます。世界では多様な文化に対する興味が膨らみ、「エキゾチック」な地域への旅行、芸術や工芸品に対する嗜好が広がり始め、バティックについても国際的なマーケットが生まれました。1960年代には現代的なニーズに対応するため、ブロックを使用したバティックが、半島西海岸やKL近郊でも生産され、ファッション性の高いものが都市生活者や外国人向けに作られました。

1970年代になると経済が発展し、ブロックによる伝統的な技法にこだわらない、ユニークなバティックを作る機運が高まります。従来の概念にとらわれない手法を駆使し、自由な発想でアートと工芸とファッションを組み合わせた、新しいタイプのバティックです。例えば、太い線を描くためにいくつものサイズの筆を使用して蠟を置いたり、チャンティンにとどまらず芸術的なインパクトを生む道具を蠟置きに用いたり、蠟を置いた後の筆による染色など、手書きの蠟置き製作が盛んになります。ただし、マレーシアでは自然から得たモチーフを好みますが、イスラム教の観点から、生き物（人を含む動物）を描くことが禁じられているため、バティックの柄として動物をリアルに描くことは一般的にはありません。大半は植物で、花やフルーツ、木の葉などがよく描かれます。ただし、動物であっても、蝶の柄や孔雀、ヒトデ、かたつむり、魚などはモチーフとして抽象化されたものは使われています。また、マレーシアのバティックでは、蠟にひびを入れ、細い線をたくさん描きだし、独特の効果を出す手法（クラック）も生まれています。

ブロックが用いられるようになって、バティック製作の効率は飛躍的に高まった。ブロック自体の制作や、重いブロックを使った型押し作業は男性が行うことが多い。

ブロック（Blok）とは、インドネシアのジャワで19世紀中頃に考案され、スタンプのように、溶けた蠟を布の上に型押ししていくための道具。

今とは違い、初期の品質はあまり良くなかったというマレーシアのバティックは、地元の人が使うサロン（スカートのように腰に巻く布）に使われ、一部は近隣の国にも輸出されていた。

訪ねるならココ！

セニョ〜ムおすすめ

東海岸の工房＆ショールーム

クアラルンプール

国際交流基金

工芸品のバティックをアートとして捉え、化学染料を使わずにマレーシアの植物による染色を用いて、バティックの質と価値を向上させることが狙いのJFKL（国際交流基金クアラルンプール日本文化センター）による伝統工芸復興支援プロジェクトは2015年に始動。その一環として、2017年にマレーシア人研究者によって設立されたKL Natural Dye（KLND）と共に、日本やインドネシアでの調査にはじまり、染材と染色方法についての調査・研究、藍の栽培、染料への加工、蝋を使用しても染料に影響が出ない染色技術まで、徹底した枠組みを築くことに成功。今年3月には2度目の展覧会を開催した。今後の目標は、KLNDが指揮をとり、職人への技術指導を中心に、天然染料を使用したバティックの発展を試みる。また、JFKLはKLNDと共に、ジョホール州にて織物「トゥヌン（Tenun）」の糸の染色にも力を入れる方針だ。

The Japan Foundation, Kuala Lumpur（JFKL）
18th Floor, Northpoint, Block B, Mid- Valley City, No.1, Medan Syed Putra, 59200 KL
03-2284 6288　www.jfkl.org.my

Sam Karuna Fine Art Batik

一見、水彩画かアクリル画に見えるこの作品。「モダンバティックの父」と称されるアーティストのサムさんが考案した「Dyetik」という技法で描かれたもの。蝋にヒビを入れて染色する「クラック」技法など、バティック要素を取り入れて、点（Tik）で描く独自のスタイルだ。また、20分で色を定着する色止め剤を独自開発したため、より美しく鮮やかな色を出すことができるのだ。サムさん主宰のアートクラスでは、この色止め剤を使用するため、作ったものはその日のうちに持ち帰り可。初心者〜中級者向けは、奥様のちはるさんの教室がおすすめだ。

【Sam Karuna Fine Art Batik Course】
05/06 G, Floor, Oasis Village, Oasis Damansara, 47301 PJ
012-379 9540（Mr. Sam）　www.samkaruna.net
【Fine Art Batik Class】
Jalan Terasek Bangsar
012-209 5280（Ms. Chiharu）　Fine Art Batik Class

KLでもバティックをもっと知ろう！

Ruzz Gahara

古くからバティック産業が盛んで、経験豊富な職人が揃うクランタンのPenambang村産のバティックを使用した、ラグジュアリーでスタイリッシュな衣類や雑貨が人気。東海岸で盛んな木彫工芸のモチーフを施したブロックバティックから始めた「ルズ・ガハラ」だが、現在はそれに特化しない新たなデザインや技法を積極的に取り入れ、鮮やかで自由な柄も豊富だ。

MUSEUM GALLERIA AT THE NATIONAL TEXTILE MUSEUM
26, Jalan Sultan Hishamuddin, 50050 KL
9am-6pm

クランタン州

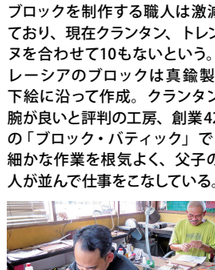
Ayu Fashion

広々とした工房に入り、驚くのは壁一面に並ぶブロックの数！　古いものだと1960年代に作られた緻密な模様が美しいブロックから、近年制作のものまで5,000以上がずらり。「アユ・ファッション」は、貧しい家庭に育ったお父さんが16歳の時にバティック工場に就職し、技術を身につけた後に独立、創業46年の工房だ。現在は息子と娘もバティックデザイナー兼職人として活躍している。伝統的な技法を駆使した独特の配色が特徴、作品すべてが一点物。

Lot 1088, Kampung Talak Chabang Empat, 16210 Tumpat, Kelantan
10am-5pm（金・土曜定休）
017-922 7155（Ms. Nik）

Blok Batik

ブロックを制作する職人は激減しており、現在クランタン、トレンガヌを合わせて10もないという。マレーシアのブロックは真鍮製で、下絵に沿って作成。クランタンで腕が良いと評判の工房、創業42年の「ブロック・バティック」では、細かな作業を根気よく、父子の職人が並んで仕事をこなしている。



KG.Chenderong Batu 16250, Wakaf Bharu, Kelantan
8am-6pm（金曜定休）
014-527 6544（Mr. Ghani）

トレンガヌ州

Batik Desa Paloh

Kraftangan Terengganu（トレンガヌ州立クラフトセンター）の研修生でもあるデザイナーのノリザさんは裏手の工房で、ブロックバティックや絞り染めを制作している。作品は併設のギャラリーショップで購入可。ここではトレンガヌ州の工芸を学ぶ研修生が創作活動を行い、さまざまな工房を自由に見学できる。

Lot 2195, Kawasan Perindustrian Chendering, 20700 Kuala Terengganu
9am-5pm（金・土曜定休）
016-415 9171（Ms. Norizah）　Batik Desa Paloh

Nysakapas

KLから結婚を機にトレンガヌへ移住したバティックデザイナーの工房。シンプルで淡い色合いの2色使いのバティックを制作している。ワークショップも随時開催。近くにあるショールームではバティックを使用した衣類や雑貨を販売している。

【ショールーム】1716-A, Aras 1, Pengadang Baru, 20050, Kuala Terengganu
【工房】2556, Kampung Serada, 20050 Kuala Terengganu
10am-5:30pm（金曜定休）
＜ワークショップ＞7時間コース（RM125）、3時間コース（RM75）、体験コース（RM35）
019-984 2720　www.nysakapas.com

Warisan Maju Timur Batik

オーナーのアジザさんはベトナムのチャム族出身。教職を経て父亡き後、父が創業したヒジャブの店を継ぐも、2009年よりマレーシアンバティックに興味をもち研究を重ね、やがてデザインを手掛けるようになった。品質が良く、伝統的なものからモダンな柄まで幅広く取り扱っている。

397-U, Taman Hajah Kelsom Taman Alamanda 2, Jalan Tekukur, 20300 Kuala Terengganu
013-955 9088（Ms. Azizah）
Cikwan Azizah Binti Ahmad
wmt_bateek

Nani Ribbon

トレンガヌの伝統工芸であるバティックやソンケットを使用した服のデザインを手掛けるニニさん。バジュクロンならソンケットのスカートにリネンのブラウスを合わせたり、カジュアルなブラウスなら前身ごろをコットンバティック、後ろ身ごろをリネンを使用したり。スタイリッシュでエレガントな服が揃う。

No.2, Tingkat Bawah Wisma Tenang, Jalan Sultan Sulaiman, 20000 Kuala Terengganu
013-627 0000
Nani Ribbon　naniribbondesigner

Sinar Suria Butik

古くから継承される文化、伝統、オールドファッションなスタイルをこよなく愛するジーさんは、トレンガヌ産の昔ながらの鮮やかな色合いと柄のバティックを、モダンなデザインのバジュクロンやブラウスに仕立てるデザイナー。多くのセレブリティが御用達だがリーズナブルなのが嬉しい。

234, Lorong 8, Jalan Bandar Baru, Pulau Kambing 20300 Kuala Terengganu
019-956 3909（Ms. ジー）
※ショールーム訪問の際は要予約。
sinarsuria butik　sinarsuria butik

Noor Arfa Craft Complex

1980年、資本金わずかRM1,000で設立したバティック工房が、現在は広大な敷地内にワークショップ、バティック実演、ギャラリー、小動物園や宿泊施設までも併設！　膨大な数のバティック製品を揃えるほか、トレンガヌ州の名産も販売。店舗奥には一点物の高級バティックも取り扱っている。

Lot 4153, Chendering Industrial Area, 21080 Kuala Terengganu　8:30am-5:30pm
09-617 9700　www.noorarfa.com

Malaysian Batik

KLテキスタイルミュージアムで聞いた！

マレーシアンバティック4つの技法

THE NATIONAL TEXTILE MUSEUM　26, Jalan Sultan Hishamuddin, 50050 KL　9am-6pm

情報提供

初代館長 ジャネットさん

キュレーター ロシダさん

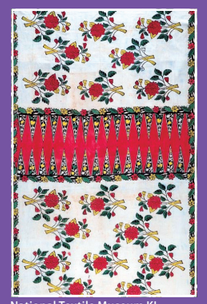
1 ブロック——マレー半島東海岸で19世紀半ばに発展。当時は木製のブロックが使用されましたが、現在は真鍮製や亜鉛製のものが主流。クッション性の高い台に布を広げ、樹脂と蝋を溶かした熱い液をブロックに付け、スタンプを押すように模様を配置します。ナフタリンと塩を加えた合成染料に漬け布全体を染色し色止めをします。洗い流して乾かしたら、1度目の染色を残したい箇所に、先ほどとは凹凸が逆のブロックで蝋を置き、濃い色の染料に布を浸します。この工程を繰り返すことで、何層にも複雑に交わった配色・デザインのバティックができるのです。仕上げに苛性ソーダ液につけて蝋に細かいヒビを入れます。ヒビに浸透した液の効果で薄い黄色のヒビ模様が現れます。これを「クラック」と呼び、目を凝らしてバティックを観察すると確認できます。熱湯で蝋を溶かし、洗い流したら完成です。ブロックバティックは容易と思われがちですが、決まった箇所にブロックで蝋を押す作業、重なりあう色と色が奏でる発色など、工程が多いほど熟練の職人にしか成しえない、巧妙な技が必要となります。

2 ハンドペイント——ブロック技法と似ていますが、一度目の蝋付けで、さまざまなモチーフのブロックで蝋付けします。布を木枠に張り、花や葉の部分を赤、青、緑、黄の染料で筆を用いて色付けします。乾かしたら、色付けした箇所にブロックで蝋を押し当てカバーし、ナフタリンと塩を加えた薄い色の染料に漬けて乾かします。残したい色の部分を再び蝋で覆い、紫、紺、黒などの濃い染料に漬けます。①同様、苛性ソーダ液に浸して「クラック」を施し、熱湯で蝋を落とします。この技法は、花や竹の子などのモチーフを強調した、色鮮やかな模様を表現します。

3 シルクスクリーン——木枠に織り目の細かいスクリーンを張り、それを通して版の下に置いた布に染料を刷り染色します。この技法がバティックに分類される理由は、染料に蝋を混ぜているからです。染色が済んだら、ケイ酸ナトリウムをゴム製のローラーで塗って色止めします。水で薬品を洗い流したあと、熱湯で蝋を落とします。ブロックでは作ることができない大きな柄も描くことができます。

4 チャンティン——マレーシアでは最新の技法で、木枠に布を張り、チャンティンと呼ばれるペン状の道具で蝋で描きます。布地は綿や絹、レーヨンなどを使用します。カラフルで自由なモチーフを描くことができるのが特徴。色止めにはケイ酸ナトリウムを用い、仕上げに熱湯で蝋を落とします。

伝統的なバティックサロンとは



National Textile Museum KL

伝統的なバティックサロンは、Body（花などのモチーフ）、Foot（布の上下の枠を彩る模様）、Head（Pucuk Rebung＝プチュッ・ルボン）で構成。プチュッ・ルボンは「竹の子」の意で、繁栄を表わします。地域によって、プチュック・ルボンの位置が前にするか後ろにするかで未婚・既婚を表わします。プラナカンの女性はプチュッ・ルボンを前にしてサロンを着用します。